

〈研究ノート〉

子育て支援における「ひろば」機能に関する一考察

櫃 田 紋 子

要約

従来、少子化対策の一環としてすすめられてきた子育て支援策は、仕事と家庭の両立支援から、親が就労しているか否かにかかわらず、すべての家庭を視野に入れた支援へと転換してきた。とくに全国各地にさまざまな形態で拡がりを見せる「子育てひろば」は予防的視点をもったひろば型支援として注目されている。2007年10月、本学の学内に学部教育と地域の子育て支援を融合させる実践の場として、親子のひろば「ほっけ」を開設したのを機に、子育て支援における「ひろば」の機能と役割について考察を試みる。

キーワード ひろば型支援、居場所機能、予防的援助、子育て臨床、人材育成

目次

はじめに

1. ひろば型支援とはなにか
 - 1) 見守る力－指導型から共感型へ
 - 2) 主体性の尊重－親自身の力をつける
 - 3) 日常性－多機能をもった家庭的な空間
 - 4) ひろばの全体構造
2. ひろば型機能に求められること
 - 1) 居場所機能－三つの心理的な場を含む
 - 2) 多世代の人々の相互交流の場－人間関係能力を育む
 - 3) 子どもと親の遊びの場－子ども理解を深める
 - 4) 学びと成長の場－親の「自分づくり」を支援する
 - 5) 相談・援助の場－生活の場における予防的な援助
 - 6) 情報交流の場－自己選択力を育む
 - 7) 人材・ボランティアの育成の場－地域を育てる
3. 地域と大学－学内の「ひろば」の課題

はじめに

近年、乳幼児期の親子を取り巻く社会環境が急速に変容していく中で、子育て支援へのニーズと実践の拡がりとともに子育て臨床という新たな研究領域への関心が高まり、その研究の体系化が一つの課題となってきた。筆者らは厚生労働省が推進する「つどいの広場事業」の運営の向上に関する研究委託を受けて、10都道府県・21施設の子育てひろばを対

象とする調査を実施した。特にモデル事例として、1) 現在のひろばの先駆けとして多くの施設や活動団体に影響を与えた、武蔵野市立0123吉祥寺 2) 保育所での蓄積を活かしつつ新たな支援の場を創出している、江東区子ども家庭支援センター「みずべ」 3) 子育て当事者である母親たちが自分たちの手で立ち上げた、横浜市のNPO法人・おやこの広場「びーのびーの」 4) カナダの子育て支援の考え方を取り入れて個人が始めた、バリアフリーの地域づくりをめざす札幌市・むくどりほーむ「ふれあいの会」 5) 生活経験の豊かな子育て経験者である中高年のボランティアを中心に地域活動の延長線上で始められた、東京都・手をつなご「親子のつどいの広場」、以上の代表的な5施設を取り上げて仔細に検討した(2003)。本研究はこの調査結果を踏まえて、いま何故「子育てひろば」なのか、子育て支援における「(子育て)ひろば」の機能と役割等について考察する。

行政における子育て支援は従来、職業と家庭を両立させる施策に重点が置かれてきたが、核家族化・少子化の進行、家族や地域環境の変容に伴い、保育所の地域子育て支援センター(1989)、幼稚園の預かり保育・子育て相談・施設開放(1997)、つどいの広場事業(2002)、認定こども園(2006)、地域子育て支援拠点事業(2008)など、次々と新しい制度化をすすめる、両親の就労の有無に拘わらずすべての子育て家庭を視野に入れた施策へと展開してきた。ところで今0歳から3歳期の子育ての担い手は、大多数が専業主婦である。とくに第一子の場合、7割～9割の女性は出産や育児を契機に仕事を退き、突然に専業主婦として育児に専念することになった人である。核家族のなかで生まれ育ち、自分が親となっちはじめて赤ちゃんに触ったという人も少なくない。男女共同参画社会にあつて30代前半までの子育て世代の5割を超える父親は、男性も育児休暇を取得すべきだと考えているが(こども未来財団2001)、実際の取得率は低迷したまま、多くの母親がはじめての育児への戸惑いや不安を抱えながら孤軍奮闘しているという状況はあまり変わっていない。一方働いている親は職場や保育所での人間関係があるために育児不安になる人が少ないといわれるが(佐々木ら1996)、居住する地域との繋がりのもち難さや共働き故の育児状況から生じる悩みを抱える親も多い。こうした流れの中で国や自治体、民間がこぞって地域の子育て支援に着目して多様な取り組みを行っている。「子育てひろば」もその一つで、子育て中の親の周りから久しく消えてしまった自然な支え合いの力を、地域社会にとりもどそうという子育て支援活動として位置づけられる。

「子育てひろば」は運営主体・運営方法等によって、保育所や幼稚園併設型のひろば、地域子育て支援センター、児童館や公民館、保健センターや医療機関でのひろば活動、国の「つどいの広場事業」によるひろば、子育てサロン・子育てサークル、その他の独自のひろば等々、さまざまな形態がある。その内容も共通に定義できないほど種々さまざまである。前出の0123吉祥寺のようにコミュニティを主体としたノンプログラム型もあれば、依然としてプログラム提供型が多い。その中で乳幼児をもつ親の在宅育児への支援として始まった「つどいの広場事業」は、常設を条件としつつ、スタッフの資格要件は極めて緩やかで、地域の誰もが参加できる多様な活動体として注目され、「子育てひろば」や「ひろば型支援」

が捉え直される契機となった。

最近では父親の育児支援、親自身の自己実現への支援、次世代の親支援、家族やコミュニティ支援、さらに企業における支援策など多面的、重層的な支援のあり方が模索されている。

今後もさまざまな子育て支援策が打ち出されていくことが予想されるが、いま「子育てひろば」に求められているのは、単に親の育児不安や子育てストレスを解消するための支援だけでなく、親自身が子育てのなかで楽しみや喜びを深く経験しながら子どもも親も共に成長し、そのことがまた、自分たちのくらし（地域）のなかに還元され、地域の子育て力を培っていくような支援のあり方であり、地域に密着したひろば型支援に期待されるものは大きい。

1. ひろば型支援とはなにか

筆者らの考える子育てひろば（以後「ひろば」）とは、親子が日常的に利用できるように身近な生活圏のなかにある常設の場で、自発的に参加して親も子どもも成長できる養育力をもった場である。施設を中心に物、情報、技術を提供する従来型の援助ではなく、それぞれの地域性、独特の文化に根ざして、地域住民と親子が主体的に活動を創り出していけるような援助をめざしている。したがって、けして固定的ではなく流動的に変化していく多機能をもった活動体と捉えることができる。このような概念規定の上にならって、ひろば型支援のキーワードと考えられる「見守る力」「主体性」「日常性」の3点から考察する。

1) 見守る力－指導型から共感型へ

人は地域のくらしの中で親が子どもを育て、その子どもが大人になり、親になり次の世代を育てるというライフサイクルを生きており、地域社会と関わって生きることは人としての本質の一つともいえる。そして子育ては地域の人々が世話という行為を通して交流しながら育児文化を伝承していく営みでもある。この『世話』のもつ力は、さまざまなものを育む力で、エリクソン（Erikson, E. H）が成人中期の課題である『世代性』を達成したときに獲得する『人格的活力』として重視しているものである。かつて近隣社会が共同体として機能していたときには、世話の力が地域の人々を結びつけ子育て期の親を支えてきた。世話といっても赤ちゃんの世話のように常に実際の行為を伴うものから若い親の成長を見守るなど心理的な行為までさまざまであるが、いずれの場合にも他者への共感や思いやりの気持ちがはたらいっている。ところが地域社会は変容して共同体は解体し、見守る大人の力も弱まり、孤立化した子育て状況が進んでいる。一方で社会の価値観が多様化して若い親たちの価値観もライフスタイルも多様化しており、自分が価値をおいているものを次世代の人々に伝えていくことは甚だ難しくなっている。指導する、教える、遊びを提供する、情報を提供するといった一方向的な支え方だけでは限界があり、相手の価値観を尊重し、その人自身の力を信じて見守るという双方向の関係の支え方が必要である。それは支援する側も利用者も対等な立場にあり、異なった価値観を認め合い共に育つという人権の意識に基づいたものである。いま「ひろば」にもっとも求められているのは、地域の中に新しい形の絆をつくっていく新たな

見守る力であろう。

筆者らが行った「ひろば」に携わる現任スタッフの意識調査(2003)では、どの施設もスタッフのかかわりの姿勢として「見守る」をあげている。「見守る」は、日常的によく使われることばや行為であるが、相手の側に立って受容、共感しながら、心理的安定と成長を促進するという深い援助的な技能を含んでいる概念である。「ひろば」は、基本的にノンプログラムで、「ひろば」での過ごし方は参加者それぞれの自主性に委ねられている。そこでスタッフ・サポーターは評価的にみたり介入したりせず、しかし何もせずに傍観するのではなく、関心をもち共感的に受け止め必要なときに手をかすことができる、まさに見守り役であり、その存在感がひろばの環境の要となる。「ひろば」には多数の見守り役が必要で、それぞれが自分たちの資質を活かし協力しあいながらひろば全体として見守っていく仕組みをつくることが重要である。

2) 主体性の尊重－親自身の力をつける

以前と比較して公的サービスは充実し、民間や企業ベースの「ひろば」も増えてきた。地域の中に、親子で利用できる場がひとつでも多く存在することはよい状況ではあるが、一方で若い親たちが新しい刺激や満足を求めて移動する問題が指摘されている。子育てとは「個育て」ともいわれるが、子どもを個として自立させることは親自身もまた子どもとの関係を通して個として自立した、親としてのアイデンティティを確立していくことである。したがって子育てを支援するということは、親が子育てを自分自身の課題としてとらえ、個として成長できるようにエンパワーすることであると考えられる。そのためには子育てサービスを一方的に提供したり導いたりするという指導型でなく、見守り型の支援が望ましい。親が主役という視点を明確にもって、親ができることを肩代わりせず、まず親自身のリソース(資質や経験)を尊重し、必要なときに必要なだけの手助けをする、できそうなことを少し後押しするなど自律的な力を高めるような援助のあり方である。

ひろばが常設であることはスタッフやサポーターとの援助的な関係、依存でない信頼関係を築いていくうえで重要な条件と考える。さらに支援する側には援助職としての専門性が求められる。支援者もまた「ひろば」の活動を通して自分自身の課題と向き合い成長していくことができるように「ひろば」自体の在り方や研修システムをつくっていくことが課題となる。

3) 日常性－多機能をもった家庭的な空間

子育てひろばに関わる人たちから、地域のなかに在る「もうひとつの家」「家庭」とか「居間(リビング)」「茶の間」ということばをよくきく。ひろばは、親子が普段着で出かけられる生活圏のなかにある親子の居場所として、きわめて日常的、家庭的な空間としてイメージされている。つまり家・家庭の居間が、ひろば型の機能モデルの一つといえるだろう。

家、居間は日常を共有する場である。家族がくつろぎ憩う、団欒を味わう、集い語らう、休息をとる、昼寝をする、食事をする、親が子どもにいろいろなことを教える、一緒に遊

ぶ、祖父母と触れ合う、新しい命が誕生する…などなど、多目的、多機能をもった空間である。外部から物理的にも心理的にも護られつつ、閉じられた場ではなく地域のさまざまな人・物・情報が交流する場である。生活を共にする家族間には役割という境界はあるが、それぞれが主体者で、対等な立場にある。そして子どもも親もだれもが発達的な存在として相互に影響しあい学びあい成長していくことができる養育力をもった場であり、なによりも誰もがその人らしくいられる自由な空間である。「ひろば」はこのような普遍的な家や家庭の居間に象徴される多機能をもった家庭的な空間をめざしているといえる。

4) ひろばの全体構造

「ひろば」は、理念、人、場所、時間、活動という大きく五つの軸から構成される。そしてそれらの間をつなぎ、全体にかかる鍵概念が「見守る力」「主体性」「日常性」ということができる。以下に簡略して述べる。

- i 理念：次世代を担うすべての子どもの健全な発達を中心に据え、生涯発達の視点にたつて、子どもも親・家族も、支援者も共に発達しつつある存在として関わりあい、育ちあう場である。根底に人間の尊厳、人権の意識が不可欠である。
- ii 人：ひろばのもっとも重要なリソースは人材である。場を提供するだけでは、ひろば版の公園デビューが発生しかねない。スタッフ、サポーターなどが有能な見守り役、ファシリテーターとして機能しているかどうかひろばの質や評価を左右する。
- iii 場所：幼い子どもを連れて遠距離移動は難しい。親が自発的に利用しやすい支援の場として、ベビーカーや自転車で気軽に行ける身近な生活圏内にある安全で安心感のある空間であることが望ましい。
- iv 時間：いつでも誰でも自由に利用しやすいこと、また継続した人間関係を築きやすいこと等から常設（または定期的開設）であることが望ましい。
- v 活動：基本的にノンプログラムで、どのように過ごすかは個人の選択に委ねられている。親子が主体的に自由に楽しんで活動できるような、物理的、心理的に十分配慮された環境づくりが重要である。

2. ひろば型機能に求められること

ひろば機能は、ばらばらに局在的に働くのではなく関連しながらひろば全体の枠組みを方向づけるものであると考えるが、基本的にどのような機能が求められるのか、7つの視点から整理して考察する。

1) 居場所機能－三つの心理的な場を含む

ひろば機能の核になっているのは、親子の居場所としての機能である。子どもの心が育つ土壌は安全で安心な場と愛情であるが、親自身もまた安全で安心感のもてる許容的な場をもっていないと子どもに十分な愛情をそそぐことができない。「ひろば」は、単に場所や遊

びを提供するだけの場ではなく、親子が安心して心を開いて過ごせる、精神的な支え・拠り所となるような場を意味する。それは三つの心理的な場を含むものである。

第一は、家族を感じられる場である。家族と一緒に居るような安全感・安心感のある場であれば、親も子も“我が家のように自由でほっとできる”“家族と一緒にいるような寛いだ感じ”で過ごすことができる。

第二は、自分らしく、自分で居られる場である。安心できる場であるときにはじめて人は防衛的にならずに自分の気持ちに向きあい、自分自身の力を発揮することができる。親が安心できる空間で子どもも安心して能動的、自律的に遊びに没頭することであろう。見守り役がいることで親は物理的にも心理的にも子どもから距離をとれる時間をもつことができるが、さらに積極的に「相互預かり」や「一時預かり」をすすめている「ひろば」もある。親だけの時間を物理的に援助する「預かり」ということも、大きく捉えるとこのような自分の場を保障する機能ということもできる。

第三は、仲間を感じて居られる場である。仲間と一緒に居る感覚をもてる場である。気心の知れた仲間がいて、親も支援者も平等な立場でおしゃべりができる、いつ行っても迎えてくれる誰かがいて存在感を失うことがない…など、仲間意識や帰属意識をもてる場である。

「ひろば」は誰もが居心地よく過ごせるように施設の整備、部屋の環境づくりにさまざまな工夫をこらすよりもっとも重要なことは、物理的な環境もさることながら人的環境であるスタッフ・支援者の役割であることはいうまでもない。

2) 多世代の人々の相互交流の場－人間関係能力を育む

子どもの心との向き合い方がわからない親が増えてきている。あやし方がわからない、叱り方がわからない、可愛いとおもえない…など、単に育児知識や技術の未熟さに因るのでなく、関係性の問題に不安や緊張を抱えて育児困難に陥っているように感じられる。こうした背景には社会全体に蔓延している人間関係の希薄化、人間関係をつくる力の弱体化がある。子育ては親が赤ちゃんという未知な人格に出会い新しい関係を築いていく過程でもありまた、子どもを通して周囲の人々との関係を新たに築いていくことでもある。人間関係をつくる力は本来親から始まりさまざまな人々と触れ合い、心と出会いながら身についていくものであるが、自然に経験（学習）することが難しくなってしまった今日、多世代の人々が集い関わりあう「ひろば」はその役割を担う場として大きな意味がでてきている。

ふだん近隣とあまり交流のない親たちは、子どもの遊び相手も親自身の仲間や相談相手も求め難いという状況のなかで、「ひろば」にやって来て地域のさまざまな人々と出会う。「ひろば」は人と人が心の出会いをする場で、スタッフやボランティアの見守りの中で仲間関係を築き成長していくことができる場である。同世代の親同士が集まればそこが競争の場になったり仲間はずれをつくるなど、新たなストレスをうむ場になる可能性もあるが、見守り役がファシリテーターとして関与することで危機的な状況にならずに却って互いの価値観の違いを認めあい、自分の子育てにも自信がもてるようになっていく。

子どもにとっても「ひろば」での交流は、親子の上下関係とは異なる横のコミュニケーション体験として大切でありまた、密着した親子関係の弊害を防ぐ意味でも必要なことである。子どもは、子ども同士の自然な力関係の中でさまざまな感情体験をしながら、自分を主張するためには相手の気持ちも考えなければならないという思いやりや共感性の芽を育ていくことができる。

最近では、中・高校生と赤ちゃんとのふれあい体験をプログラム化して行なう「ひろば」もみられる。赤ちゃんの豊かな感受性や親子関係にじかに触れる体験は人間関係能力の基礎を育むよい機会となるもので、次世代の親支援という観点からも積極的にすすめてほしい活動である。

3) 子どもと親の遊びの場－子ども理解を深める

ひろばは親子が時間と場を共有するための遊びの空間である。どんな絵本、おもちゃ、遊具を選択したらよいか、親子が同じ空間のなかで上手に距離をとってゆっくり遊べるようにするにはどんな配置をしたらよいかなど遊び環境の充実に重点がおかれる。家庭とまったく違うのはTVやビデオは置かれていないこと、代わりに見守り役の大人たち、ときには学生のボランティア等が参加していることである。家庭より広さのある部屋で、母親に抱かれた小さな赤ちゃん、ひとりでお坐わりのできるようになった赤ちゃん、這い這いやよちよち歩きで動きまわる赤ちゃん、就園前の元気な幼児も一緒に過ごす。幼い子どもたちは大人に甘えたり遊び相手を求めるなど大人への依存的な行動をとりながら、子ども同士の遊びを少しずつ広げることができる。一見すると同じ場所に居てもそれぞれ別個に遊んでいるように見えるが、どんなに小さい赤ちゃんでもじっと見る、声をあげる、笑う、手をだす、ちょっかいをだす、真似る…など、お互いの存在に特別の関心を向け、関わりをもちながらその子どもなりの遊びをたのしんでいる。

赤ちゃん時代は遊びが生活の中心で、よりよい遊びを通して心もからだもよりよく成長する。赤ちゃんは生得的に旺盛な好奇心と学習能力をもった存在であるから、その力を発揮できる環境があれば自発的に遊びを見つけだし、たのしみ、その中で発達していく。したがって子どもが充実した遊びができるように環境をつくるのが親の役割でもあるが、あやし方がわからない、遊ばせ方がわからない、相手をするのは苦手という若い親が徐々に増えているのが実態であろう。

筆者らは、在宅育児をしている0歳から3歳児をもつ母親を対象にアンケート調査を行った。子どもはどんな遊びが好きか、誰と一緒に、外遊び、テレビやビデオの視聴時間など、家庭でどのような遊びをしているのかを記述してもらった。その結果をみると、おもちゃを介さない親と子の遊びは生後3～4ヶ月時では約60%を占めるが、6～7ヶ月で半減、10ヶ月以降さらに減少していく。逆におもちゃを介したひとり遊びが6～7ヶ月時に約70%、以後さらに多くなり12～13ヶ月時でも70数%を占めている。子ども数が少ない分おもちゃの種類は豊かになっているが、ものを介して親と子がやりとりをする遊びの出現率は低く、ひ

とりでおとなしく遊べるいい子、ぐずったらテレビ・ビデオという図式が窺えた。ひとりでじっくり物とかかわる遊びは発達的に大切にしたいすがたでもあるが、親と子がゆっくり向き合う遊びが少なくなっていることに留意したい。

子どもの自発性を引きだし発達を促進するには、大人の側に発達を見通して遊びを提供する力や子どもの発達のパースに添った応答性や情緒的な安定感などが求められるが、はじめでの育児に戸惑っている親にとって知識や情報だけでは甚だ難しいことである。

「ひろば」に参加することで親は、さまざまな月齢の子どもたちの遊びや支援者の対応に触れ、子どもの個性を発見したり、発達への理解を深めることができる。また遊びには多少の技術も伴うが、「ひろば」で体験して身につけたり、とりわけ親子で遊ぶことの楽しさに気づき、子育ての楽しさを深く味わうことができるようになる。もちろん子どもにとって親以外の世界を広げていくことは社会性を育てていく上でも大切なことである。

4) 学びと成長の場－親の「自分づくり」を支援する

子育ての時期は第二の思春期ともいわれるが、幼児との関係を通して親自身の心が揺らぐときである。出産・育児の前にはあじわったことがない未知な経験に伴う不安感を和らげ、親自身で成長できるような場を提供するのは「ひろば」の大きな役割である。

学ぶことはまねることだとしばしばいわれるが、学ぶ機会がないまま親になってしまった若い人にとっては、同世代の仲間や年齢差のある子育て経験者がつくる「ひろば」は、まず相互観察・模倣の機会をうむ学びの場としての意味がある。「ひろば」で他の親や子どもの様子や支援者の関わり方をみて学ぶことが安心したり確認したりするのに役立っていることであろう。

子育てはその時々柔軟に対応する応用力が求められるものであるが、今日のように育児情報が氾濫する中で、模範解答もないし正解も一つでない子育てに、自分の子どもはこれでよいと自信をもって育てていくことは容易なことではない。自分の価値観に照して、自分の子どもを一人の人格としてかけがえのない存在と認めて育てていくには知識や経験だけでは不十分である。子育ての中で親自身が「自分はこれでよい (good enough)」という自信、セルフ・エスティーム (自己肯定感や自尊感情など) が高められていくことが重要なことで、そのためには親自身が子育てを通して自己実現できるようなゆとりのある社会の仕組みをつくっていかなければならない。

「ひろば」は、さまざまな人々が集い出会いさまざまな関係が生まれる場で、そこに多種多様な学びの機会を生む可能性がある。親にとって育児という日常的で素朴な活動を多世代の人々と共有し、異なった価値観を認め合う経験を通して、子どもとの関係や自分自身への気づきを深めたり新たな生き方を模索する場となっている。学習会や講座、サークル活動など目的をもった活動も親主導ですすめられることが多くなってきている。子育てを軸に、家族の絆や夫婦関係を考える契機になったり、親としてでなく一個人として能力を発揮できたり、仕事復帰への見通しがもてたり、地域活動をはじめたり…など、生き方や生活全体に目

を向けた取り組みへと広がっていく。子育ての価値観も多様化している今日、「ひろば」は直接的には育児支援の場であるが、同時に親自身がアイデンティティを立て直すのを支援する場でもあるといえる。

5) 相談・援助の場－生活の場における予防的な援助

「ひろば」の重要な機能として、親が子育ての中で抱える悩みを深刻化させないで解決できるように援助する予防的な役割がある。ふだん相談というかたちをとらなくても、「ひろば」が親子の居場所として十分に機能しているなら、親同士の自由なおしゃべりがカタルシス（感情の浄化作用）となり自ら悩みを解消し安心して子育てに専念できるような力となる。

「ひろば」は専門の相談機関ではないので、対応の難しい問題は専門機関を紹介したり連携をとっていくことになる。したがって相談室や専有のスペースをもって専門職を配置しているところは少ない。スタッフやサポーターたちが相談員で、いつでもどこでも相談員がいる場所が相談のスペースになって相談できる生活場面面接（Life Space Interview）が主たる相談のかたちである。親にとっては日頃気になっている子どものからだの健康や発達のようす、しつけ、教育などについての“ちょっとした”悩みや心配ごとを、相談というより気軽に話をきいてもらうという日常的な触れあい場面であろう。しかし相談員としてのスタッフやサポーターたちは、「目的をもった対話」をしているのだという援助的な姿勢をもっていないと、単なるおしゃべりの中にある問題の本質を見落としてしまったり、親の感情に共感できなかつたり、ときには相談員の一言が親の気持ちを深く傷つけてしまうことも起こり得る。スタッフ・支援者等の研修はそのための意味がある。

電話相談やメール相談などを行なう場合、ひろば全体の「場のもつ支えあいの力」を活用できないことがネックになる。顔のみえない相談であることでかえって話しやすいと感じる親もいるが、自発的に「ひろば」に足を運んでもらうことを目標にして、そのための親との関係づくりの過程と位置づけて対応に留意する。

相談内容はほとんどが育児相談的なものであるが、「ひろば」の相談にも、虐待や親の問題など専門的な対応が必要な事例が少しずつ増えてきている。子育て支援に携わるものとして、虐待は決して他人事でなく身近にも起こりうることであるという認識を日頃からもって臨んでいることが望ましい。心の問題というのは、専門機関にあがってくるまでに時間を要する。虐待をする親の場合多くは無自覚的に始まって次第にエスカレートしていく。親が自分からサポートを求めることが少ないため対処が遅れて最悪の事態になることもある。子育てに自信のない親が増えていくなかで、潜在的に問題を抱えている家族を視野に入れた予防的な対応を考える必要がある。

「ひろば」が親子の居場所として十分に機能していること、またスタッフやサポーターを中心にひろば全体の見守る力が豊かに在ること、さらに虐待予防の観点を日々の活動の中に位置づけること等によって、予防（日常生活）→気づき→対応という自然なしくみをつくっていくことができる。勿論ひろばは虐待の発見が目的ではなく、虐待にいたらない段階で育

児不安やストレスへの援助をすることである。以下に日常的に心がけたい活動例を挙げる。

- ①日常の援助的かわり：それぞれの親子の日常の様子（常態）を支援者が共有している。
- ②カンファレンス（事例検討会）：臨床心理士等がスーパーバイザーとして同席する。
- ③グループ・ワーク：ニーズに合わせて対応できる有用なプログラムをもっている。具体例として、i) 予防的プログラム（ノーバディズ・パーフェクト・プログラム）：ファシリテーション技法を用いた親主導の参加型の学習プログラム。互いの価値観を認め合う体験を通して問題を解決し、自らの子育ての力を高めることができる。ii) 問題対応的プログラム（レインボウ・プログラム）：心の痛みを回復し自己肯定感を高める。被虐待幼児から虐待の加害者である親まで、種々のレベルに対象して組織化されたプログラム。筆者らが実践・研究中であるが、虐待の連鎖を断つという意味で予防的観点からも優れている。
- ④虐待予防に関する学習会・研修会、講演会・公開講座等
- ⑤情報提供：リソース（他機関・活動団体・関係者・ボランティア等）を充分にもっている。
- ⑥他の機関・団体との連携：情報や活動の共有、交換等を含め、地域づくりの一環として継続して行なう。
- ⑦巡回相談（臨床心理士等による）：気になる事例について相談。ふだんの様子を記録しておくとおくとアセスメントに役に立つ。
- ⑧アウトリーチ：子育て困難で危うい状況にある親子が「ひろば」を利用できるように、まず情報を届けることから始める。

筆者らの調査（2005）によると、親たちがもっともよく利用する子育て支援は「ひろば」であり、相談相手に選ぶのはパートナーや祖父母に次いで子育て仲間が約60%、専門家・相談機関は数%であった。孤立化しがちな子育て期の親たちにとって「ひろば」は、日常の延長線上の場であって、特別に相談に来る場所という認識は少ないが、ちょっとした子育ての悩みを話し合える場として、予防的な機能を果たしているものと推察された。ひろば相談を支えている支援者の役割は極めて大きい。将来的には相談機能の拡充が必要になってくるものと考えられる。

6) 情報交流の場－自己選択力を育む

メディア時代の現代の親はさまざまな情報ツールを使って豊富な育児情報を手に入れることができる。またインターネットで子育て仲間をつくり情報交換することもできる。しかし親のニーズ調査（2005）によると幼い子どもをもつ親がもっとも欲しい情報は「ひろば」に関するもので、「ひろば」を利用している親は利用していない親と比較すると、「ひろば」だけでなく子育て関連講座、子育てサークル、母子の健康や医療に関する相談など、地域のさまざまな子育て支援を有意に多く利用していることが認められた。つまり実際に「ひろば」に来て生のコミュニケーションを介して仲間をつくり、情報交換をすることで「ひろば」を扱

点にしてさらに他の社会資源にも繋がっていくが、「ひろば」を利用できない親は仲間と繋がりが難しく、情報を得る機会が少なくなり孤立した状況に陥りやすいということが推察された。

「ひろば」は地域のさまざまな人や情報が入り交じる交流点として親同士が情報交換する場と機会を提供しているが、まずは「ひろば」に関する情報を親たちに周知させることが必要になる。そしてもっとも大切なことは、親自身の力をつけるような情報提供のあり方ではないだろうか。いま親たちは好むと好まざるにかかわらず過剰な情報の中に置かれているが、本当に必要な情報を自分で選択して決定することができる力を身につけられるようにサポートするのは「ひろば」の役割でもある。日々の活動のなかで自然に行なわれるような仕組みをつくっていくためのポイントを挙げておく。

- ①情報の一本化：子連れで遠くまで足を運ばない親も利用しやすいように、他の機関・団体と連携してさまざまな子育て情報を集約する。
- ②ストック：子育てに必要な情報を幅広く収集する。
- ③フィルタリング：情報（判断材料）を正しく親に提供する。
- ④分類：情報（判断材料）をわかりやすく提示する。
- ⑤情報の出し方：情報（判断材料）を提供し、親自身が選択・決定する。
- ⑥親参画で広報活動・出版活動をする。

7) 人材・ボランティアの育成の場－地域を育てる

ひろば型の機能のさいごに人材・ボランティアの育成について述べる。さいごに取り上げたが実は「ひろば」の要は人間である。どんなにすばらしい理念を掲げ、どんなに整備された施設でも人材が育たない「ひろば」は長続きしないし、地域に根づくことは難しい。

「ひろば」はスタッフやサポーター、ボランティアそして親子が共に創る空間である。ひろばという名称どおり、さまざまな人々が集い、対等な立場で自由に語らう場である。親子が心地よく過ごせる居場所は、そこに参加する地域の誰にとっても居場所として機能していることであろう。ただし、そのようなひろば環境であるためには、スタッフやボランティアがそれぞれの役割に自覚と責任をもって担っていかなければならない。まずスタッフは、さまざまな価値観をもつ人々を繋げる繋ぎ役であり、また心理的に安全な場を提供しながら親としての成長を促進するファシリテーターであり、「ひろば」という組織を維持・運営する人でもあって、相当な資質・力量を求められる。勿論はじめからスタッフとしての資質に恵まれた人もいれば、ひろば活動を通して問題意識を深め、スタッフとしての輪郭を明確にしていく人もいようだろうが、あくまでも個人的レベルでなく、ひろば全体の仕組みの中で、質の高いスタッフ意識の醸成や資質の向上を図ることができるような研修システムをつくるのがそれぞれの「ひろば」の課題であろう。

「ひろば」の運営にはたくさんのボランティアの協力が不可欠である。イベントなどに一時的に携わるものもいれば、常時携わるものもいるが、特技を活かしたり見守り役として重要な役割を果たす。いずれにしても援助職としての力をつけることが望まれる。「ひろば」

は、未来を担う子どもたちを親と一緒に育てていこうという願いをもって地域の多世代の人々が活動を支えている。そして支えられた親たちが支え手になったり、子育てを通して地域活動に関心を向けるようになったりなど、「ひろば」を拠点に同心円的に地域のさまざまな社会資源・リソースへと広がっていく。生活圏のなかにある常設の場ということが地域の人々が交流しやすいということもある。地域づくりの一環としても多様な可能性をもった活動体として期待される。

3. 地域と大学—学内の「ひろば」の課題

本大学は2007年4月こども学部の開学に際し、地域社会における子育てやこどもの福祉を支援する人材育成を、地域社会との緊密な連携において実践的に展開していくための拠点として、こどもコミュニティセンターを学内に設置した。そして2007年10月より親子のひろば「ほっけ」を定期的に開設している。「ほっけ」は地域に暮らす主として0歳から3歳までの乳幼児とその親の子育てを支援する場であると同時に、学生が子どもや親子、家族、地域の人々と直接あうことができる実践的な学習の場である。学生が体系化された体験授業や、空き時間に自発的に「ひろば」のプログラムに参加して自らの課題や問題を発見し省察するという研究的な姿勢を通して保育者としての専門性を高めていくことをめざしている。

本学の「ひろば」は当初より学部の実習教育の一環としてカリキュラム化され、学内授業との連携のもとにすすめられている。「ひろば」のスペースは、保育・子育てに関する実習・演習室として環境を整備している。フロア全体は遊びのスペースと赤ちゃんコーナー、スタッフコーナー、談話・情報コーナーの4つの専有スペースから構成され、付帯設備として遊びのスペースにサークルテーブル・遊具・おもちゃ・絵本コーナー等、赤ちゃんコーナーに授乳室・ベビーバス・おむつ交換台等、その他小児用トイレや洗面台、自然に恵まれた庭等々を整備している。そしてこの「ひろば」の活動にこども学部の教職員がそれぞれ何らかの役割を持って学生とともに関わることができるような体制で臨んでいる。

今日、地域の子育て家庭支援は児童福祉法においても、保育所保育指針や幼稚園教育要領においても明確に位置づけられるなか、保育者養成校の学内「ひろば」への関心が高まってきた。本学の「ひろば」もまだ緒についたばかりであるが、今後さらにさまざまな活動を展開していくにあたって、大学内の「ひろば」の意義、課題について考察する。

先に筆者はひろば型機能について、7つの観点から論じた。即ち居場所機能、多世代の人々の相互交流の場、子どもと親の遊びの場、学びと成長の場、相談・援助の場、情報交流の場、人材・ボランティアの育成の場等である。これらは設置主体が大学であるか否かにかかわらず、「ひろば」の活動を実践していく上で基本的に留意していくことであるが、それでは大学施設としての「ひろば」のあり方、独自性とはなにか。大学も地域資源の一つであって大学と地域は本来、相互に有形無形さまざまに影響しあう関係にあるが、今日のような子育て困難な社会状況の中で、大学としての文化と地域ニーズを融合させる新しい「ひろば」の形を創るうえで何が課題となるのだろうか。

まず第一に大学の「ひろば」は大学独自の教育理念の基にその理念を具現化するための場の一つであり、必然的に学生教育とセットで捉えられるものである。直接的には「ひろば」への学生の参加のしかた、学びの姿勢が課題となる。保育者を志す学生にとって、「ひろば」は子どもとその親に4年間継続してじかに接し、子どもの拠って立つ家族や地域を含めた総合的なこども理解を深めることができる学びの場であるが、それが子どもにとって、親にとってどのような意味をもつのか等をつねに留意する必要がある。本学の場合、「ぼっけ」の理念をひろばに関わる参加者がいかに共通理解し、共に関わりあい育ちあうことができるかに腐心している。例えば学生参加は一日6枠、1枠3名のシフト制を組んでいるが、事前学習や事後の検討会における継続的なサポートを通して気づきを促進している。また専門の支援スタッフ（教員・非常勤スタッフ）が常時参加して学生や利用者、ひろば全体のファシリテーターとして状況に応じて柔軟に対応している。大学の「ひろば」は、立地環境にもよるが、概ね大学周辺の地域住民が参加者であり、多くの親は大学に固有のイメージを付与して「ひろば」に参加する。したがって学生の参加を当然のこととして了解し、むしろ積極的に期待することが多く、学生との間に親和感情をもち、支えられる側だけでなく学生の育ちを支えるもの、学生教育の一端を担うものという意識をもって、相互の関係性を築いているすがたが窺える。学内「ひろば」での実践は、地域のニーズと遊離せず大学の理念をいかに地域活動へ繋ぎ、拡げていくのが課題である。

第二にこどもを核としたコミュニティの地域実践モデルとしての意味である。かつて子育て期の親の周りにはコミュニティがあり、フォーマル（町内会、子ども会など）にもインフォーマル（親戚、近隣のつきあいなど）にもさまざまな支え手が存在し、子育ての場、生活の場を保障するためにまさにひろば型支援が機能していた。地域は老いも若きも、障害のある人もない人も共にくらす有機的な空間であった。現代の「ひろば」はこの自然な仕組みを地域に再構築しようとする活動である。先にひろば型の機能の特徴について述べたが、「ひろば」の中心はあくまで子どもであり、子どもが健やかに育つための生活の場を提供するために必要な機能であるともいえる。現代社会に失われてしまった地域の連帯性、共同性を築き新たなコミュニティを創ることは簡単ではない。しかし「ひろば」が子どもを中心に据え、さまざまな価値観をもった人々が子どもとともに育ちあう「子育てコミュニティ」として真に機能する場であるなら、「ひろば」の参加者一人ひとは単なるa memberではなくthe memberとしての帰属意識をもち、「ひろば」を拠点にやがて地域への帰属意識が醸成されていくのではないか。そのためには、とくに人的環境の充実が肝要であるが、教育機関である大学は自ずと幅広い可能性をもっている。ひろばの語意には、いろいろな立場の人々が集い、肩書きをはずして自由に語り合う場という意味があるが、大学人としてその専門性だけでなく専門家・非専門家という枠を超えてそれぞれが一個人、一社会人として「ひろば」に関与し、学生・親子・地域の人々とともに「ひろば」を創る過程で、多彩な成人モデルとしての役割を担うことが期待されている。

第三に子育て臨床の専門職の養成である。「ひろば」は多くのスタッフ・サポーターある

いはボランティアによって支えられているが、とくに支援スタッフの存在は「ひろば」の性格や方向性を左右するほど大きいものである。現在、支援スタッフの主たる担い手は圧倒的に保育職が多い。勿論支援スタッフは有資格者ばかりではなくさまざまな背景を持つ人々であるが、子育て臨床の場を支える支援職としての専門性が求められるようになり、研修講座の内容検討や体系化が課題となっている。まだ歴史の浅いフィールドであるが今後、保育職の活躍の場の一つとして確立されていくのではないかと考える。保育者養成校における学内「ひろば」は、子育て臨床の専門職の養成に向け地域と連携した実践の場としての意義が高まっていくものと考えている。

参考文献

1. 伊志嶺美津子・櫃田紋子・大豆生田啓友他、「子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究」、平成15年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書、2004.3
2. 伊志嶺美津子・櫃田紋子・大豆生田啓友他、「子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究」、平成16年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書、2005.3
3. 伊志嶺美津子・櫃田紋子・TOHMAS. Mary他、人権尊重と相互扶助の市民意識に根ざしたカナダの子育て家庭支援システムの研究、平成9年・10年度トヨタ財団助成研究報告書、子ども家庭リソースセンター、2001.4
4. 櫃田紋子・伊志嶺美津子・大豆生田啓友他、「つどいの広場事業」の運営の向上に関する研究、平成15年度児童環境づくり等総合調査研究事業報告書、こども未来財団、2003.3

Summary

A Consideration to Supporting Function for Parenting Families at Drop in Center

Hitsuda Ayako

The aid package of supporting function for parenting families has been carried on conventionally as anti-declining birth rate measure and for the compatibility of work with child care. But it changed over to support from the viewpoint of including all parenting families whether the parents set to work or not. Especially the drop in centers which expand over the country in various formation attract attention as a model of drop in support with preventive viewpoint. Our university established a drop in 'Pokke' on the campus in October 2007 as a place of practice to let college education and supporting local parenting families fuse. The paper is to try consideration about the function and the role of drop in center in the supporting function for parenting families.

Keywords Model of Drop in Support, Function of Comfortable Place to Stay, Preventive Viewpoint, Facilitator, Training of Human Resources